

資料

パワーポイントノート(本資料)

望ましい英語授業と楽しさの要因に関する質問紙

望ましい英語授業の枠組と参加表現の楽しさ要因の関係

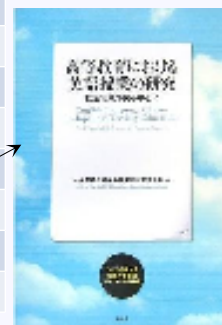
(望ましい英語授業と参加表現の楽しさ要因からなる枠組)

問題の所在

英語授業学研究

「英語授業学」関連研究の経緯 鈴木(2011:54)より

年	著作等
1983年	若林(1983:186-187)
1984年	若林他共編(1984)
1990年	若林俊輔教授還暦記念論文集編集委員会編(1990) 「第2言語習得理論ではなく徹底して現場的なものを」
1991年	松畑(1991) 「名人芸の一般化」
2001年	『「英語教育の推進について」の検討素案』(2001)
2004年	「田辺メモ: 大学英語教育の在り方を考える」(報告) 大学英語教育学会授業学研究委員会発足
2007年	大学英語教育学会授業学研究委員会編著(2007)
2010年	大学英語教育学会第二次授業学研究委員会発足 山岸・高橋・鈴木編著(2010)



本研究の定義

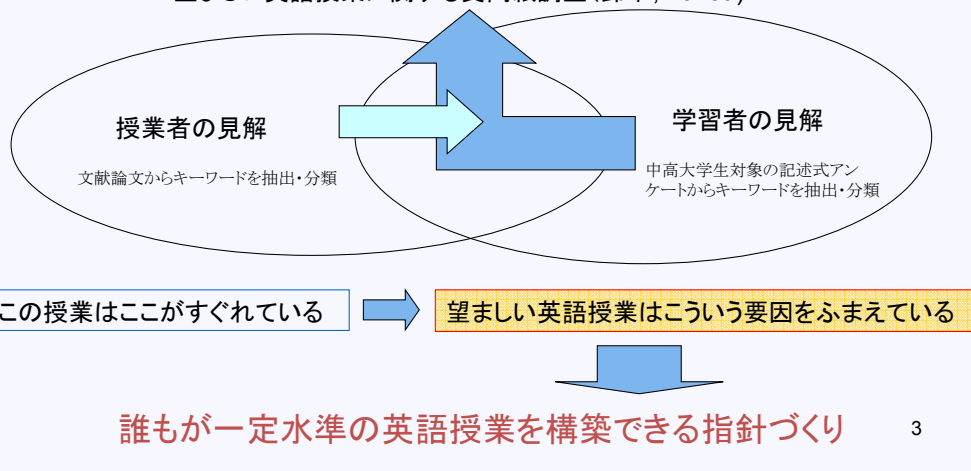
望ましい英語授業の枠組み、その枠組に含まれる項目とその関係を明らかにする研究 2

英語授業学という用語が著書等で使われ始めたのは80年代前半から。当時は校内暴力の嵐が吹き荒れ、海外から移入された教授法や第2言語習得理論は現場では役に立たないという見方があった。こうした背景を踏まえ、現場の知恵を集め体系化するための試みとして英語授業学が提唱された。そのためこの時期の英語授業学研究では中高の実践を分析対象としたものがほとんどであった。90年代に入ると英語授業学関連の著作も増えた。その中で英語授業学を著書のタイトルにしたのが松畑(1991)であった。英語授業学の枠組を提起し、「名人芸の一般化」と位置づけた。高等教育における英語授業実践に焦点が当てられるようになったのは2000年に入ってからで、大学英語教育学会授業学研究委員会編著(2007)は大学における授業実践事例を集録した著作としてまとめた形で公刊されたのは初めてと言ってもよいだろう。

英語嫌いや苦手意識の強い学習者が相変わらず多い中、名人芸の一般化も大切かもしれない。それ以上に大切なのは、どの先生でも一定程度以上の授業づくりができるようになる指針が必要であろう。しかも1回ごとの授業で完結することなく、短期・中期・長期の見通しを持てる授業づくりの指針があるにこしたことはない。その際授業者の考えだけでなく、学習者が望ましいと考える授業の枠組を提起することで、英語嫌いや苦手意識の克服ができるようになるかもしれない。こうした問題意識から、本研究では英語授業学を、望ましい英語授業の枠組、その枠組に含まれる項目とその関係を明らかにする研究と位置付ける。

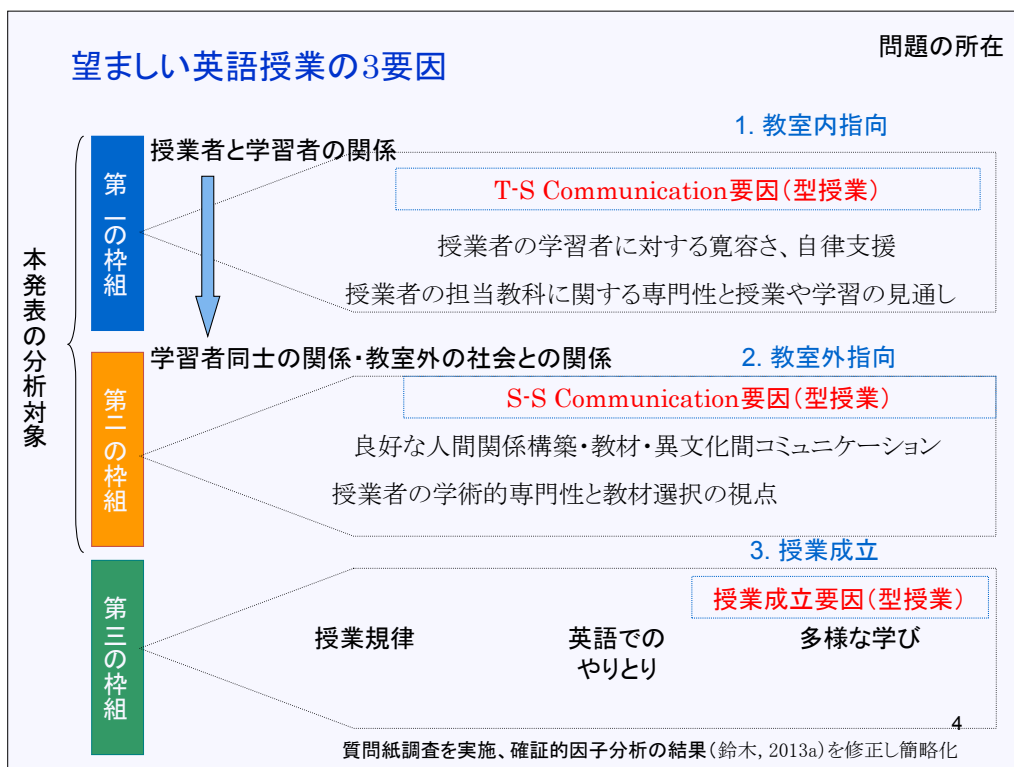
望ましい英語授業の項目と枠組

望ましい英語授業に関する質問紙調査(鈴木, 2013a)



3

日本では戦前から授業研究という取り組みが盛んであった。授業研究は教材研究や指導案を作成。授業を公開し、参加者で授業内容を分析し次の授業実践に活かすというサイクルを繰り返すものであった。こうした努力が戦後日本の教育を支えたことは否定できないし、近年海外でも授業研究(Lesson Study)は評価されるようになってきた。しかし、授業研究で蓄積した知恵はなかなか広く共有されることが少ないように思われる。特に新任の先生がある程度の質の授業に取り組むといった場合、どのような点に注意すればよいのかがわからない。毎時間の授業を自転車操業で進めることが多くなる。つまり、「この授業はここがすぐれている」という分析に加え、どのような点を踏まえれば一定水準の授業ができるようになるのかという指針が必要であると思われる。特に生徒学生の視点を取り入れた授業づくりの指針があれば、英語嫌いや苦手意識の強い生徒学生を引き付けることができるのではないかと考えた。生徒学生の視点からみた望ましい英語授業の要因を探る必要があるということである。



質問紙調査のデータを因子分析にかけたところ、望ましい英語授業には3つの要因があることがわかった。第1の要因は**T-S Communication**要因であり、主として授業内指向の項目から構成されている。内容としては授業者の教科に関する専門性、授業や学習の見通し、学習者に対する寛容さや自律支援を重視したものとなっている(**T-S Communication**型英語授業)。第2の要因は**S-S Communication**要因であり、主として授業内の取組に加え授業外に目を向ける授業外指向の項目から構成されている。内容としては、教室内での良好な人間関係の構築、社会問題などに関する教材による学習、異文化間コミュニケーションや授業者の学術的専門性や教材選択の視点を重視したものとなっている(**S-S Communication**型英語授業)。第3の要因は授業成立要因であり、授業成立に関わる規律、英語でのやりとりや多様な学びに関わる項目から構成されている。第3の要因はごく一般的にみられる授業の型であり、本研究の分析対象から除外した。

楽しさの5要因

問題の所在

1. 参加表現の楽しさ ◎

個人の発表がうまくいく
ペアで会話練習ができる
考える活動とグループの活動がある
英文の内容をわかってもらえる

グループの発表がうまくいく
考えを英語で表現できる

2. 言語文化的知識の楽しさ

英語を話す人との文化の違いがわかる
語源を教えてもらえる
教科書の国について詳しく勉強できる

3. 教科書外の楽しさ ○

映画の表現を知る
教科書以外の英語の本を読む
外国へ行った時の話をしてもらう
英語の新聞が読めるようになる

4. 熟達の楽しさ

文法文型の問題ができるようになる
長文の問題ができるようになる

5. 多様な学びの楽しさ

ビンゴを使って勉強する
コンピュータを使って勉強する

質問紙調査を実施、確証的因子分析の結果（鈴木, 2012）

5

同様に質問紙調査の結果、生徒学生の考える楽しさには5つの要因があることがわかっている。特徴的なのは、教科書外の内容を学びたいという要因が抽出されたことである。学習意欲の低下が問題とされる中、生徒学生はもっと幅広く学びたいと考えていることがわかる。また、参加表現の楽しさの内容についても着目する必要がある。参加表現と言えばペアワークやグループワークを思い浮かべるが、それ以外にも考える活動や書いた英文の内容がわかってもらえる、考えを表現できるなど、考えることや表現するという内容が含まれている。学習者は見た目の華やかさだけでなく、考えたり表現したりすることも求めていると考えることができる。この発表では、この参加表現の楽しさ要因が研究の中心となる。

すぐれた英語授業と楽しさの関係

- すぐれた英語授業の要因と楽しさは**重なる部分が多い**(森住, 1980)

相反する見方

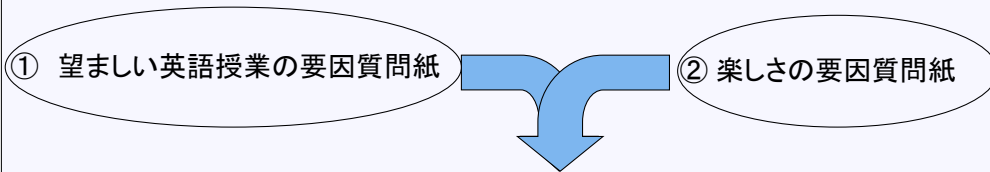
楽しい英語授業は
すぐれた英語授業ではない？

- **楽しさが学力形成につながっていない**
(齊藤, 2002; 鈴木, 2011)

6

生徒学生を英語学習に向き合わせるには楽しい英語授業が必要であると考え授業実践を進めることが増えた。これは「楽しい英語授業はすぐれた英語授業と重なる部分がある」(森住, 1980)という見解に通じる。しかし、現在行われている授業の楽しさは、英語学力形成につながっていないという見解もある。確かに楽しい英語授業は増えたようにも見受けられるが、英語学力が伸びたという話を耳にする機会は少ない。英語授業における楽しさと望ましい英語授業の要因は重なるのか、それとも別物なのか、もし別物であるとすれば望ましい英語授業とどのような関係にあるのか、こうした事柄について検証をする必要がある。

望ましい英語授業の要因に楽しさの要因は内包されるのか 別物なのか？



③ 望ましい英語授業の要因と楽しさの要因に含まれる
質問項目の統合

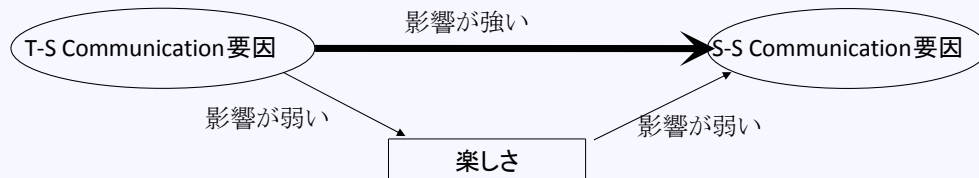
①②の調査で抽出された要因と、③で抽出された要因で共通していたもの

→T-S Communication要因、S-S Communication要因、参加表現の楽しさ要因

結果の概要は、補足資料(スライド19)参照。

望ましい英語授業の2要因と楽しさの関係

鈴木(2013b)



楽しさ: 授業に対する漠然とした印象

英語の授業は楽しいと 思う 6・5・4・3・2・1 思わない

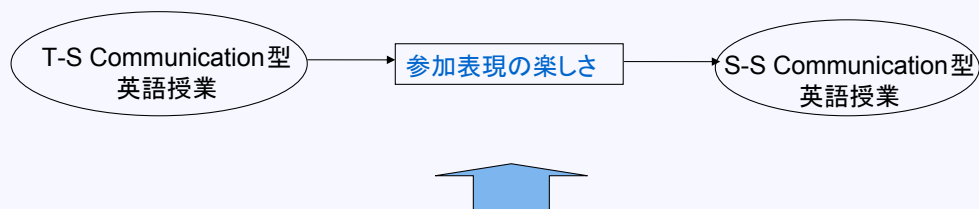
現在学習者が受けている授業の楽しさは
S-S Communication型英語授業に発展していない可能性

8

T-S Communication要因とS-S Communication要因を変数にした共分散構造分析の結果、前者は後者に強い影響を与えていようであった。これは、T-S Communication型英語授業を重視すれば、S-S Communication型英語授業にスムーズに移行する可能性を示唆している。

また、別の調査結果(鈴木, 2012)では、T-S Communication型英語授業よりもS-S Communication型英語授業の方が、楽しさとの関係が若干ではあるが密接であるということがわかっている。望ましい英語授業の要因に関する質問紙には、『英語の授業は楽しい』という項目が含まれていた。6件法(6・5・4・3・2・1の6段階)で回答するものであり、現在受けている(もしくは過去に受けてきた)英語授業に対する漠然とした印象を問う項目であったことから、T-S Communication型英語授業がS-S Communication型英語授業に移行する際、楽しさは両者を媒介する役割を果たしているのではないかと予測した。しかし、楽しさを変数にしたモデルのパス係数を見る限り、T-S Communicationから楽しさの影響は強いとは言えず、また楽しさからS-S Communication型英語授業への影響はさらに強くないことがわかった。つまり、現在行われている英語授業の楽しさは、楽しさだけが独立していて、望ましい英語授業の要因との関係があまり密接ではないことがわかっている。これは、前述の斉藤(2002)や鈴木(2011)が指摘する通り、楽しさが英語学力形成につながっていないという見方と一致するとも考えられる。

参加表現の楽しさ要因の役割

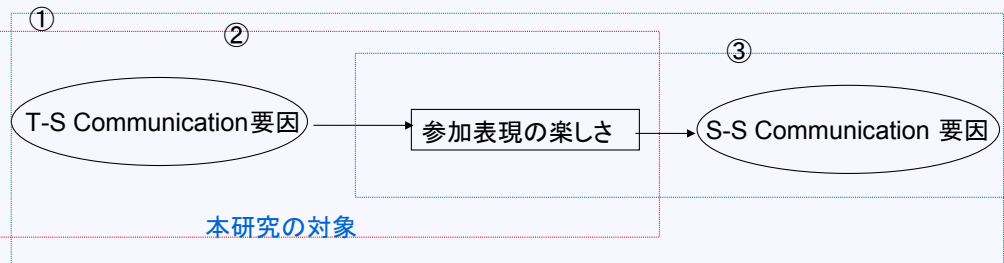


有効な橋渡しとなる可能性を示唆

楽しさと望ましい英語授業の要因とさほど関係がなかったが、生徒学生が考える楽しさの要因は、もしかすると望ましい英語授業の要因と関係があり、両者を媒介する役割を果たしていることが考えられる。T-S Communication型英語授業とS-S Communication型英語授業の間に参加表現の楽しさ要因をはさんだモデルを想定し、実際に参加表現の楽しさ要因が望ましい英語授業の要因の橋渡しとなっているのかを分析する必要がある。

研究の目的

T-S Communication要因が参加表現の楽しさにどのような影響を及ぼしているのかを分析すること



本研究の対象

参加表現の楽しさ要因の役割

楽しさの5要因のうち、参加表現の楽しさ要因が、T-S Communication型英語授業とS-S Communication型英語授業の有効な橋渡しとなる可能性を示唆

10

このモデルでは、3つの要因全体の関係、T-S Communication要因と参加表現の楽しさ要因の関係、参加表現の楽しさ要因とS-S Communication要因の関係の3つについて分析をすべきであるが、本研究では、まず望ましい英語授業の枠組の入り口となるT-S Communication要因と参加表現の楽しさ要因の関係をまず分析したい。

方法と手続き

方法

- 1) 66項目からなる6件法の質問紙により調査を実施(資料1)。
- 2) T-S Communication要因に含まれる質問項目を分類し、信頼性係数を確認。良好であれば平均値の算出。
- 3)分類した質問項目群の平均値を独立変数に、参加表現の楽しさ要因の平均値を従属変数とし重回帰分析(変数増加法)

対象者

関東近県の中高大学生1357名
(中学生362名、高校生779名、大学生216名)。

調査期間

2012年10月から12月。

11

データは鈴木(2013c)で収集したものを使用した。

結果

信頼性係数(Chronbachの α)

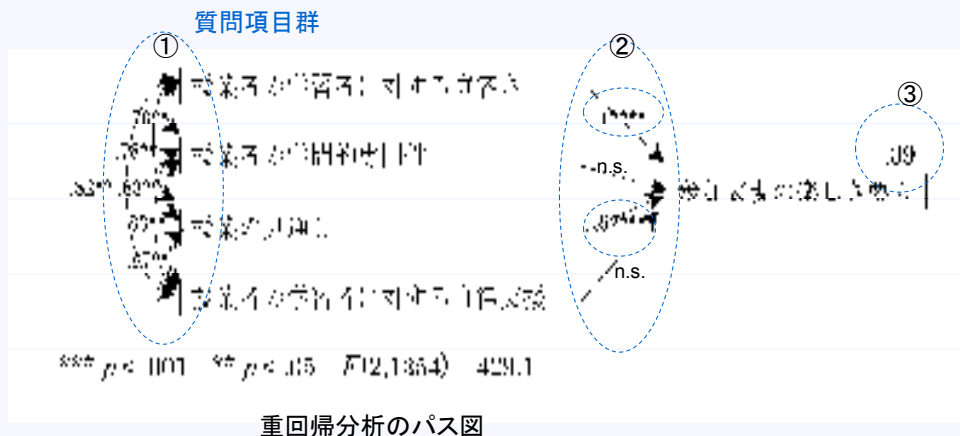
質問項目群	α
授業者の学習者に対する寛容さ	.89
授業者の学問的専門性	.80
授業の見通し	.90
授業者の学習者に対する自律支援	.91
参加表現の楽しさ	.93

12

各要因に含まれる質問項目の合計得点や平均値を比較する前に、信頼性係数(Chronbachの α)を確認する必要がある。信頼性係数とは回答の傾向がどの程度一貫しているか(内的整合性)を数値として算出する。基本的に.80以上であれば回答の傾向が一貫しており、平均値や合計得点の差を比較してもよいと考える。今回のデータにおける質問項目群の信頼性係数はいずれも十分な数値であった。

結果および考察

授業者の学習者への寛容さ、授業の見通しからのパスのみ有意



教室内向向要因は全体として楽しさにつながるが、個々の項目がどのように結びつくのかは学習者自身が十分認識できていないことを示唆



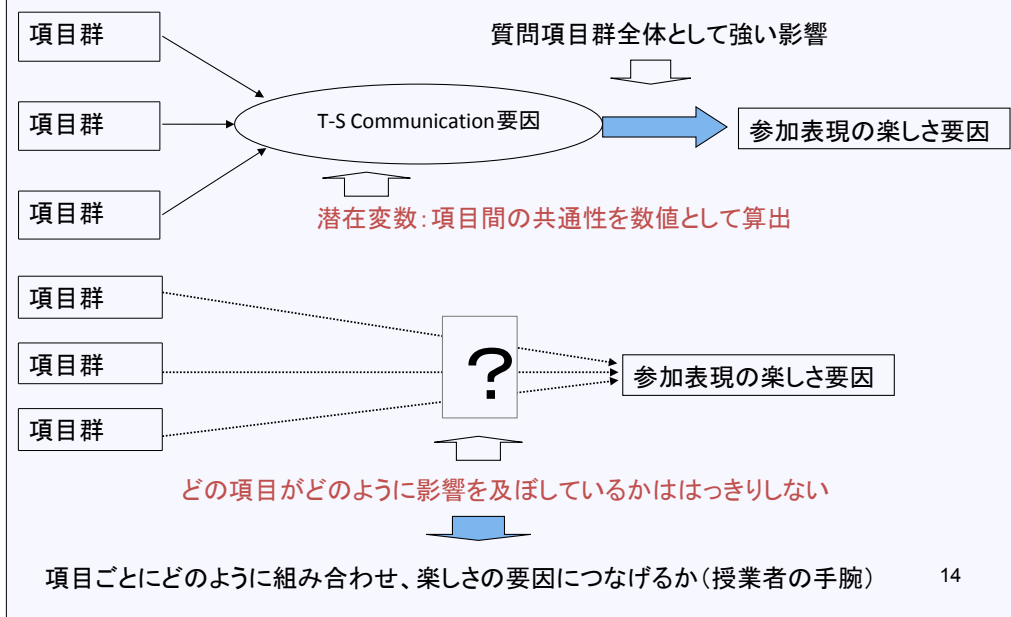
どう結びつけるかは授業者の手腕にかかっている

13

- ①質問項目群同士の相関は高かった。しかし、
- ②参加表現の楽しさ要因へのパスで有意になったのは、授業の見通しと授業者の学習者に対する寛容さのみであった。しかもパス係数はあまり高いとは言えず、強い影響を与えていない可能性を示唆した。
- ③また、重相関係数の平方 (R^2) も.39であり、質問項目群が参加表現の楽しさ要因を説明する割合は39%程度とこれも高いとは言えなかった。

安心して参加表現の楽しさを活かした授業を進めるには、学習者は授業の見通しがはっきりしていないと不安になってしまうのかもしれない。また授業者がいていねいなだけでも、学習者は安心して参加表現の楽しさを活かした授業に参加することを不安に思うことからパス係数が低くなっている可能性も考えられる。いずれにしてもパス係数や R^2 があまり高くなかったことから、全体的に **T-S Communication** 型英語授業が参加表現の楽しさを活かした授業にどのように結びつくのかを、学習者は十分認識していないことを反映していると考えられる。どのように結びつけるのかを考え、具体的な授業づくりに反映させるところで授業者の役割が問われるとも言える。

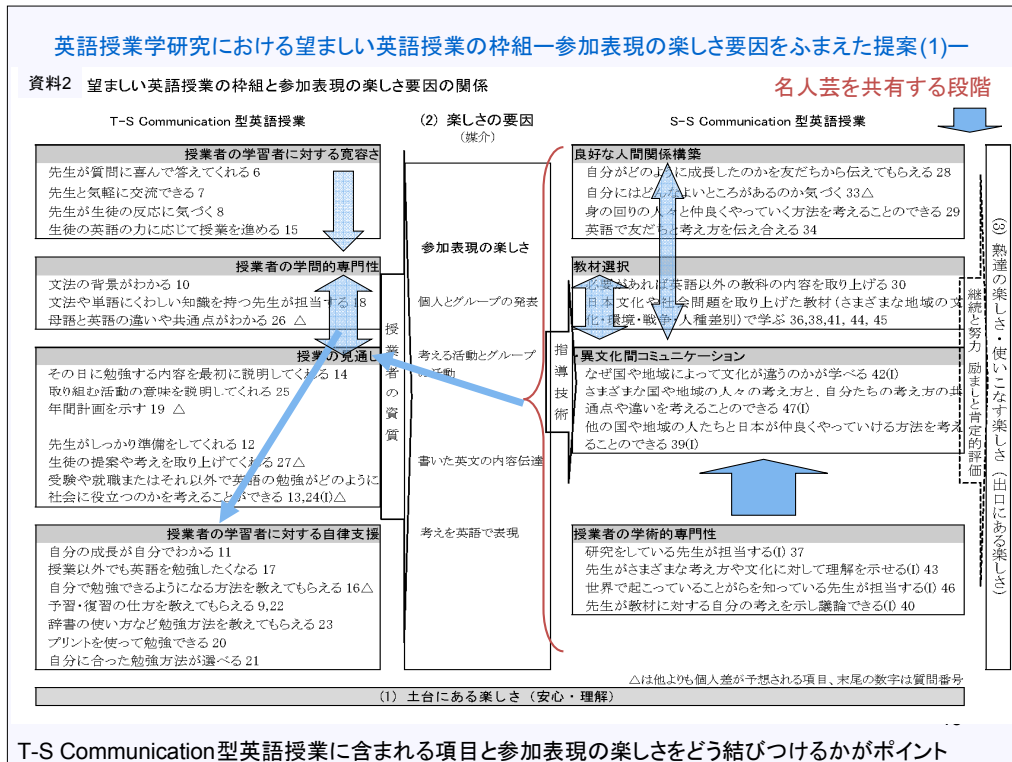
考察 共通性と個別の影響



因子分析では項目群の共通性を数値として算出し、他の要因との関係を予測する。共分散構造分析では、T-S Communication 要因全体から参加表現の楽しさ要因への影響が強かった。これは

- 授業者が学習者にていねいに対応し、
- 教科に関する専門的な知識があり、
- 短期・中期・長期の見通しを示した上で
- 自分で勉強する方法を教えてくれたら、

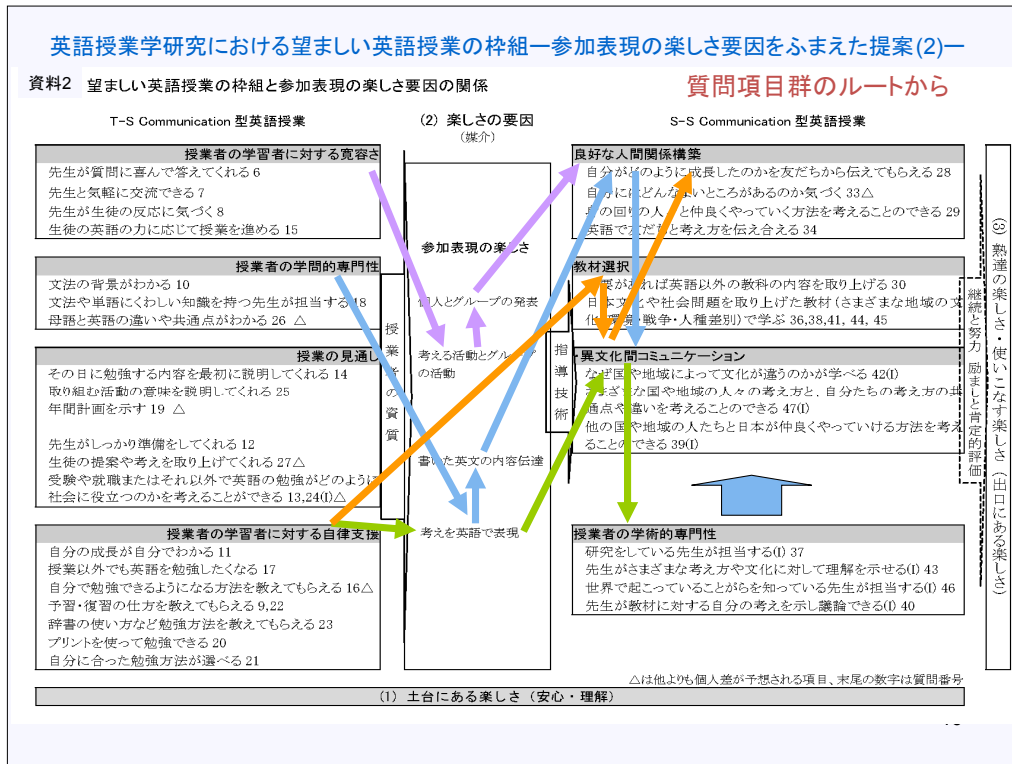
参加表現の楽しさはもっと増すだろうと漠然と考えていると考えているとも考えられる。



T-S Communication型英語授業、S-S Communication型英語授業および参加表現の楽しさ要因に含まれる質問項目を組み込んだ枠組を作成してみた。

授業者が丁寧に教える背景には、教科内容(英語そのもの)に関する専門的知識がなければならない。個別の言語材料をわかりやすく教えることも重要であるが、年間もしくは学期ごとに学ぶ内容との関連を授業者が示し、英語を学ぶ目的を示したり、プリントを用意するなどの明確な見通しが求められる。こうしたことを前提に、自分たちで学ぶ方法を教えてもらうことを学習者は求めていることをこの枠組は物語る。T-S Communication型英語授業はS-S Communication型英語授業に移行することを想定しているのであるから、授業の見通しには、S-S Communication型英語授業の内容を反映させるべきだろう。この時期にこの言語材料を取りあげるにあたり、教材解釈をどう進めるか、その中に学習者が自分や仲間のよいところを認め合い、互いが仲良くなるような活動を組み込む。こうして形成された良好な人間関係を異文化間コミュニケーションに対する意識に発展させる。こうした長期的な見通しにもとづき年間の授業を組み立てることが必要だろう。

前述の松畑(1991)における「名人芸」とは、S-S Communication型英語授業を熟達の楽しさや使いこなす楽しさにつなげる際必要となるのではないだろうか。授業の熟達者は、何にどの程度取り組みればおおむねどのような成果が上がるかを体験的に知っているはずである。これをリストとして蓄積し共有・確認することで、追実践に取り組む授業者はより自信を高めるようになるだろう。



個々の項目のつながりを考えながら授業を組み立てることも可能である。

【ピンク矢印のルート】

授業者が丁寧に説明する→各自で考えグループ内でも交流をする→これを個人もしくはグループの発表へとつなげる→お互いのよいところを評価し合いながら教室内での良好な人間関係を構築する。

これは英語による自己表現の授業実践のルートを示している。この枠組では、個人やグループの活動で自己表現の活動は完結せず、自尊心や他尊感情につながってこそ意義のある活動になる。

【水色矢印のルート】

授業者が単語や文法に詳しい知識を持っていて、母語との違いを説明してくれる→自分の考えを英語で表現する→書いた英文を発表し内容が伝わる→友だちの価値観、その共通点や相違点がわかる→異文化間コミュニケーションの学習に進む。

【黄緑色のルート】

自分で勉強する方法がある程度わかる→考えを英語で表現する→異文化間コミュニケーションの視点を身に付ける→学習者の活動から授業者がさらに学問的専門性を高める。

もし自律した学習者であれば参加表現の楽しさ要因を経過しなくともS-S Communication型英語授業に移行することは十分考えうる。つまり、自律支援を十分受ける→教材に触れ内容を理解する→異文化間コミュニケーションを意識する、というルートもありうる。もともとT-S Communication型英語授業からS-S Communication型英語授業への影響は極めて強かったことから、自律した学習者にとって楽しさの要因は必要のないものであるとも考えられる。つまり、英語授業における楽しさの要因とは、ある意味一過性のものとしてとらえる必要があるのかもしれない。

本研究の課題

1. 枠組にもとづく授業実践事例の提案

T-S Communication型英語授業

→参加表現の楽しさ要因

→S-S Communication型英語授業

2. 参加表現の楽しさ要因をふまえた望ましい英語授業の枠組のもとになるモデルの適合度検証

3. シラバスとポートフォリオの統合

ホームページ: <http://msuzuki.sakura.ne.jp/> 17

課題2、3については、日本リメディアル教育学会第7回全国大会(2013年8月29日、30日、広島修道大学)で発表の予定。

参考文献

- 大学英語教育学会授業学研究委員会編著(2007)『高等教育における英語授業の研究－授業実践事例を中心に』東京:松柏社
- 松畑熙一(1991)『英語授業学の展開』東京:大修館書店
- 森住衛(1980)「楽しい授業とは何か」『英語教育』29(1), 56-57 大修館書店
- 斎藤栄二(2002)「楽しければそれでいいのか」『語研ジャーナル』(3), 93-96.
- 鈴木政浩(2011)「英語授業の『楽しさ』を構成する要因とその相互作用に関する研究－英語授業学研究からのアプローチ」『第37回全国英語教育学会山形研究大会発表予稿集』104-105
- 鈴木政浩(2012)。「英語授業における『楽しさ』の要因に関する研究 A Study on Factors of Enjoyment of Learning English in Classroom.」*KATE Bulletin*, 26, 1-14.
- 鈴木政浩(2013a)。「望ましい英語授業の要因」『言語教育研究』第3号, 85-95 桜美林大学大学院言語教育研究科.
- 鈴木政浩(2013b)「望ましい英語授業の2要因の関係－楽しさの影響をふまえた分析－」『言語文化教育研究』第3号 東京言語文化教育研究会
- 鈴木政浩(2013c)「望ましい英語授業と楽しさの要因の関係－英語授業学研究の視点からのアプローチ－ Relationships between Factors of Preferable Teaching Practice and Enjoyment of Learning English in Classroom」大学英語教育学会(JACET)関東支部大会(青山学院大学)
- 鈴木政浩・三沢渉(2013)「望ましい英語授業と楽しさの関係」*KATE Bulletin*, 27, 43-55.
- 若林俊輔(1983)『これからの英語教師－英語授業学的アプローチによる30章』東京:大修館書店
- 若林俊輔教授還暦記念論文集編集委員会編(1991)『英語授業学の視点 若林俊輔教授還暦記念論文集』東京:三省堂
- 若林俊輔・森永誠・青木庸效 共編(1984)『英語授業学 [指導技術論]』東京:三省堂
- 山岸信義・高橋貞雄・鈴木政浩編(2010)『英語教育学大系第11巻 英語授業デザイン 学習空間づくりの教授法と実践』東京:大修館書店

過去2回の調査から引き出された結論

探索的因子分析

- | | | | |
|------------------------|---|-----------|-----------------------------|
| 1.T-S Communication 要因 | } | 前回調査と同じ因子 | →信頼性、要因の安定性
→意見が分かれにくい要因 |
| 2.S-S Communication 要因 | | | |
| 3.参加表現の楽しさ要因 | | | |

- | | | |
|-----------------------------|---|--------|
| 4.T-S・S-S混合要因 | } | 不安定な要因 |
| 5.熟達・学習深化の楽しさ要因 | | |
| (5要因のうち言語文化的知識・教科書外・熟達の3要因) | | |

別々の要因に分かれた

→ 学習者は**楽しさの要因**と**望ましい英語授業の要因**は別物と考えている可能性

確証的因子分析(モデル適合度)

GFI	AGFI	CFI	RMSEA
.780	.760	.871	.065

鈴木(2013c) 19

GFI, AGFI, CFIは.90以上で良好(ただし、GFI > AGFI)。RMSEAは.05以下で良好、.10より小さければ許容範囲。ただし、自由度が多いモデル(変数、つまり質問項目などの数)はGFI, AGFIが下がる傾向にあるため許容範囲内とみなす。適合度が良好でないことでモデルがだめだと考えるのではなく、モデルをどう解釈するのかで、研究の方向性を探るということになる。

探索的因子分析の結果、望ましい英語授業に関する質問紙調査、楽しさの要因に関する質問紙調査と同じ要因が抽出された(T-S Communication 要因、S-S Communication 要因、参加表現の楽しさ要因)。また、過去の調査とは異なる要因に含まれた項目も存在した。

結果的には、楽しさに関する質問項目は望ましい英語授業の要因に含まれることはなかった。このことから学習者は楽しさの要因と望ましい英語授業の要因を別物と考えている可能性が高いことがわかった。さらに、楽しさの要因に含まれる質問項目のうち、参加表現の楽しさ要因には前回とまったく同じ質問項目が含まれた。このことは楽しさの要因のうち、参加表現の楽しさがもっとも安定しており、意見が分かれにくい要因である可能性を示唆した。望ましい英語授業に関する質問項目に関しては、前回と同様の因子に含まれたものとそうでないものがあった。つまり、望ましい英語授業要因に含まれる質問項目の中には、学習者により意見が分かれるものも含まれている可能性があることがわかった。